

音楽と 非人間

第五回

会場

九州大学大橋キャンパス
音響特殊棟 録音スタジオ

2024年10月21日(月)

18時半開場 19時開演

パンフレット電子版は
こちらから→



九州大学大橋キャンパスの音響特殊棟で開催される「音楽と非人間」第5回にご来場いただき、ありがとうございます。

「音楽と非人間」第5回では、全く異なる方法で神霊的な非人間との関わりに焦点を当てた2人の作曲家の作品を、ヴィオラ奏者、赤坂智子がお届けします。

18世紀初頭のヨハン・セバスティアン・バッハは、構造的・数学的な完全性を目指す音楽は宇宙におけるキリスト教的变化に寄与すると信じており、その考えは彼の音楽全般、特にヴィオラ組曲に表れています。この曲を記述し、演奏し、聴くことで、私たちは、ひいてはこの世界は、より完全で魅力的なものになるというのです。

ゼミソン・ダリル（九州大学助教）による「デスカント4」では、ヴィオラ奏者は環境の一部として耳を傾けられます。この曲では世界の完全性を追求したり、世界を変えようとするのではなく、世界に溶け込み、その一部になろうとするのです。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたり、JSPS 科研費 23K00215 の助成、そして後援を賜りました九州大学芸術工学部をはじめ、ご協力をいただきました各位に心より厚く御礼申し上げます。

主催者

シリーズコンセプト

今年度の「音楽と非人間」というコンサートシリーズは、3年間の研究プロジェクトの一環で、前近代的で非西洋的な存在論に根差した日本の哲学と美学を基にして、人間の音と非人間の音の関係を新たな視点から解釈します。作曲家たちは自然や精神的な要素との関わりを探求し、前近代の哲学や能楽の作品からインスピレーションを得ています。自然からのインスピレーションやフィールドレコーディング、伝統楽器を用いた現代音楽が交差し、不安定な時代において音楽を創り、聴き、共有する、(そして議論する)、意味のある方法を定めていきます。

プログラム

9月29日(日) 16:00

演奏者

赤坂智子

曲目

J. S. Bach Suite no.4 BWV 1010

1. Prelude
2. Allemande
3. Courante
4. Sarabande
5. Bourrée I / II
6. Gigue

後
援

九州大学



大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

本研究は JSPS 科研費 23K00215 の助成を受けたものです

J. S. Bach Suite no.5 BWV 1011

1. Prelude
2. Allemande
3. Courante
4. Sarabande
5. Gavotte I / II
6. Gigue

休憩

Daryl Jamieson

Descants 4 『デスカント 4』 自然環境の中におけるヴィオラのために (2021)

J. S. Bach Suite no.4 BWV 1010～no.5 BWV 1011

ゼミソン・ダリル著・井上公太訳

啓蒙時代の初期における器楽曲は争点となる立場にあった。バロック時代を通して、声楽曲は器楽曲よりも高い評価を得ていたが、その原因には、世界が現実や科学へと向かっていったように、音楽は天球の調和を反映したものであるという（プトレマイオスを祖とする）考えや、特定の素材（リズム）パターンは唯一神と共鳴し得る（例えば、3拍子はキリスト教的な神・イエス・精霊の三位一体を反映したものと見なされている）といった考えが力を失い、そして言語のみが音に意味を与えるものとして残ったことが挙げられる。フランスの作曲家、ジャン＝フィリップ・ラモー（1683-1764）は1722年に音楽とは“音の科学である”と高らかに宣言し、ハーモニーに対する現実的な理解への道を切り開いた。そこから1世代を下って、哲学者であり作曲家でもあったジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）は声楽曲が言語の始祖ではないかと思索した。ラモーの考えは19世紀の純粋器楽曲の価値観へと通じる最初の一歩であり、ルソーは声の権威を主張しようと試みたが、彼らはどちらも非宗教的な啓蒙思想の象徴であり、彼らの考えは天上の調和としての音楽の機能や人間の精神・身体と単独で結びつけられるような音楽の再配置を遠ざける一因となった。

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）は当時、異質であった人物の代表例である。彼は初期の啓蒙時代の作曲家であると同時に熱心なキリスト教ルター派の信者であり、教会で用いるための声楽曲と非宗教的な用途のための器楽曲の両方を手がけ、音程や周波数比が宇宙論を反映しているという前啓蒙主義的な考えをまだ信じていた。ラモーの音の科学やルソーの受肉した、人間中心的な音楽といった啓蒙時代の同期たちの前衛的な音楽観は彼にとって容認しがたいものであった。バッハの作曲は物理学的な音との調和ではなく、魅力に満ちたプトレマイオス的キリスト世界の宇宙との調和のためにあった。また、彼は聴き手や演奏者が彼の音楽からそういった宇宙の調和を聴き出し、より神に近づくことを望んでいた。

今夜はバッハの2つの組曲、第4番・第5番組曲を演奏する。これらは一般的にはチェロ組曲として知られているが、バッハがこれらをどの楽器のために書いたのかははっきりしておらず、ヴィオラによる演奏も珍しくはない。組曲はどちらも6つの楽章によって構成されており、前奏（prelude）に5つの舞踏のための楽章が続く。2つの組曲の間では第5楽章のみが異なる舞踏のものであり、第4番では2つの Bourrées、第5番では2つの Gavottes のための音楽である。

これらは最も演奏難易度の高い組曲のうちの2つである。例えば、第5番の前奏は6つのチェロ組曲の中で唯一フーガ形式が登場するものとして注目すべきである。単一の楽器によるフーガのポリフォニックなテクスチャーの実現には2つの声部の同時の演奏より、第一声部と第二声部の音域の違いが用いられている。（同時の演奏も起こり得るが、ヴァイオリンソナタにおける同様のポリフォニックなパッセージに比べると極めて稀である）バッハの全ての組曲の至る所に現れるメロディーラインやポリフォニーラインの優位性にはバッハが音楽制作の古いモデルに忠実であったことや、彼がラモーの音の科学の考え方に否定的であったことが反映されている。

それ以外の困難としては調律が挙げられる。バッハにとっての音楽の重要な側面はキーボードの音律であったと考えられる。組曲の中で3拍子が広く用いられているのがそうであったように、調律（原理的には、ピッチの異なる音波の波長比）は音楽の数霊術と結びついた側面であり、神（三位）や自然、宇宙論と共鳴する音楽の機能である。第4番組曲では変ホ長調が用いられているが、これは開放弦を用いた協和音が少なく、現代のヴィオラ（やチェロ）にとっては難しい調である。これによって醸し出される情緒はその分だけ不自然に映る。対して、第5番組曲は4弦の調律が全音下げ（スコルダトゥーラ）の状態演奏される。この再調律がこの作品をより技術的に難しいものとしているが、高音域の音色が暗くなるものの楽器による共鳴振動は増幅する。（バッハの意図から逸れた余談だが、仏教の“慈悲”、元のサンスクリット語ではカルナと呼ばれる語が、まさに共鳴振動を意味していることは興味深いことである）この豊かで、暗い音が楽器の性質を大きく変化させ、聴く者を悲劇的で宇宙論的な情緒へといざなう。

Daryl Jamieson『デスカント 4』

ミソン・ダリル著

『デスカント』は自然環境の中で奏される、ソロ奏者のための作品シリーズである。「自然」という語について、この場では、人為・非人為という区別を避け、人工の環境をも含むこととする。音楽自体が前景化されず、また自然のサウンドスケープから分かれず、むしろ作曲された音楽自体が自然の音響の一部になることを企図している。

『デスカント』第4番はヴィオラのための5曲で構成されている。中世日本の詩歌、その他の芸術に関わる概念の元で緩く構造化されている——密教・儒教・自然がそれである。わけても重要な概念は「生きとし生けるものいづれ歌詠まざる」で、「生けるもの」は草木国土（植物、水、石、大地自体）であり、そして「歌詠み」と仏教を崇拝することであり、三密を明らかにすることという意味である。

赤坂知子が2021年に福岡市の生の松原で録音した『デスカント』第4番は、2024年12月末に <https://atelierjaku.bandcamp.com/>（デジタルとCD）で発売される。

プロフィール

演奏者

赤坂 智子 / AKASAKA Tomoko



ジュネーブ音楽院にて今井信子女子に師事の傍同校助教教授を経た後、ライブツィヒ、デュッセルドルフ音楽大学にて後進の指導に当たり、現在ミュンスター音楽

大学教授。

桐朋学園大学在学中より、セイジ・オザワ松本フェスティバル、NHK 名曲アルバム等に出演。

海外では、スイス・ルツェルン、ヴェルビエ音楽祭、オーストリア・ザルツブルク音

楽祭等に常時招かれ、コンサートではベルリン・フィルハーモニーホール、ウィーン・ムジークフェラインなどのホールにてリサイタルに出演。

第53回ミュンヘン国際音楽コンクール第3位授賞。パンドレトン財団よりミュージシャン・オブ・ザ・イヤー授賞。

ゼミソン・ダリル / Daryl Jamieson



ヨーク大学（英）で博士号取得（作曲）。その後来日、東京藝大の作曲家・近藤譲氏の薫陶を受ける。九州大学助教（現職）。第3回一柳慧コンテンポラリー賞受賞。作品は能や日本の伝統音楽、詩歌から強い影響を受けており、現在は音楽的時間と歌枕の心理——地理学に深い関心を持っている。主要作品に「歌枕シリーズ」、演劇音楽「ヴァニタス・シリーズ」三部作、大規

模室内楽曲「コノソ」がある。現代音楽美学に関する論文多数。ミュージック・シエター「工房・寂」芸術監督。

www.daryljamieson.com/jp

今後の「音楽と非人間」について

今回は 2024 年最後の「音楽と非人間」コンサートです。

2025 年のコンサートの情報は、X (旧 Twitter) や Peatix で公開する予定です。

以下のリンクや QR コードでぜひフォローしてください。

また、芸術工学部 YouTube チャンネルでは、過去のコンサートから選りすぐりのパフォーマンスをご覧いただけます。



X (旧 Twitter)

https://twitter.com/geikou_otobunka



Peatix

<https://soundculture.peatix.com/>



芸術工学部 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/@KyushuUniversityDesign>



音楽と
非人間